

多国間学術拠点形成事業「アジアの最先端有機化学」

磯部 稔,^{*,a} 西川 俊夫^b

JSPS Asian Core Program on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia

Minoru ISOBE^{*,a} and Toshio NISHIKAWA^b^aInstitute of Advanced Research, ^bSchool of Bioagricultural Sciences, Nagoya University, Furocho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

(Received December 11, 2008)

The vision to establish this program was to establish and extend cooperative research efforts beyond the intraregional boundaries. The Japan Society for the Promotion of Science (JSPS) has taken an initiative to support an Asian Core Program, which aims to create world-class research hubs within the Asian region and foster the development of the next generation of leading researchers by establishing sustainable collaborative relations among research and educational institutions in Asian countries. Nagoya University strongly supports and is the Core University of this program with Minoru Isobe and Toshio Nishikawa serving as the coordinator. Representing their respective countries/regions, Guo-Qiang Lin and Zhu-Jun Yao (China, Shanghai), Sunggak Kim and Kwan-Soo Kim (Korea), Somsak Ruchirawat (Thailand), and Chun-Chen Liao and Biing-Jiun Uang (China, Taipei) share in the vision to enhance collaborative efforts. As coordinators they have invited many cooperative universities/institutes in their home countries/regions to start the network since 2005. Singapore (Tech-Peng Loh) has joined lately, and Hong Kong is represented by Henry Wong. All cooperating regions also agreed to support this program by acquiring matching funds for the duration of the program, that is, until March 2010. This program is jointly supported by the JSPS (Japan), the NNSFC (China, Beijing), the NSCT (China, Taipei), the KOSEF/CMDs (Korea), the NRCT/CRI (Thailand), and the IUPAC for an East Asian Network Task group project. Pauline Chiu takes the general secretary work. The initiation of the Asian Core Program and the Inauguration Conference (The 0th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia; ICCEOCA-0) was held in Nagoya (2006. 3), which was followed by ICCEOCA-1 in Okinawa, Japan (2006. 10), ICCEOCA-2 in Busan, Korea (2007. 9), ICCEOCA-3 in Hangzhou, China (2008. 10). A post symposium of ICCEOCA-1 was held in Hsinchu, Taiwan (2006. 10), and a satellite symposium of ICCEOCA-2 was held in Bangkok, Thailand (2007. 11). Future international conferences will be held in Bangkok (2009. 11) and Taipei (2010).

Key words—Asian Core Program (ACP); Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia; International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (ICCEOCA); East Asia

1. はじめに

アジアから発信される化学関連の学術論文が全世界総数の1/3を超えた。今世紀に入り、中国の急伸とともに日本をはじめとする東アジア諸国の堅実な伸張がこれに貢献していることは疑いもない。また、欧米からの化学系の学術論文発表数が下降気味であることも相対的にアジアを目立たせている。経済の発展は、極めて広い領域に影響を及ぼし、急速にその文化と社会に変革をもたらすとともに、科学

技術に指数関数的な成長をもたらす。学術の動向についても、経済発展により受ける影響は多大である。日本の有機化学領域でも、前世紀末までの欧米追従型学術動向から変わり、現在では世界をリードするようになった。かつて欧米の有機化学に学んだアジアの研究者が自国に帰り、独自の研究方向を定めてその成果を挙げるようになり、さらに世代交代の時期にはいつている。隣国アジア諸国でも、数多くの研究者が素晴らしい研究成果を上げている。それでも共通語が英語であるためか、国際学術雑誌は欧米主導型であるという状況は続いている。本稿は、最近活発になっているアジアの動向について、筆者がアジア研究拠点事業 (ACP 事業)・IUPAC 活動を中心に経験した分野について紹介する。

^a名古屋大学高等研究院, ^b同大学大学院生命農学研究科 (〒464-8601 名古屋市千種区不老町)

*e-mail: isobem@agr.nagoya-u.ac.jp

本総説は、日本薬学会第128年会シンポジウム S39 で発表したものを中心に記述したものである。

2. 国際交流事業の背景と現状

わが国に隣接する国々との交流は、2 国間交流のみならず多国間方式に拡大している。一般的に 2 国間事業は専門領域を設定するために比較的小規模であり、研究者同士が親しく議論し合う機会として極めてよい方式である。有機金属化学・天然物化学・有機合成化学・薬学などの領域では、日韓・日泰・日中などの交流が先行して実績を上げている。一方、国際的すなわち多国間学術交流を展開するための方策があれば、アジアの全体像をつかむという目的が果たされると期待されてきた。既にその時期は熟していたように思う。2005 年 8 月には、北京で IUPAC 総会に伴って開催された全世界化学指導者会議での課題は、「アジアの化学・新機軸」であった。ICSU の会長である Mehta 教授は、科学と教育界の中核に起きている異変について概説された。筆者である磯部は、IUPAC Organic and Biomolecular Chemistry President としてアジアにおける有機化学研究者の多国間事業の幕開けを報告した。2006 年には野依良治教授の努力により、アジア各国化学会などの協力を得て“*Chemistry—An Asian Journal*”誌 (Weily VCH 社) が創刊された。

3. 事業組織

このような背景の中で日本学術振興会が 2005 年に募集を開始した「アジア多国間学術拠点形成事業」はまことに時期を得たものであったといえる。名古屋大学は大学の受託事業として本事業計画に賛意を唱え、筆者・磯部が事業のコーディネーターを務めることとなった。国外では中国・上海有機化学研究所・林強國 (Lin Guoqian) 教授、韓国・KAIST/CMDS の Sunggak Kim 教授・タイ国・CRI (Chulabhorn Research Institute) の Somsak Ruchirawat 教授、台湾・清華大学・廖俊臣 (Liao ChunChen) 教授、日本では 7 大学 (北大・宮下正昭；東北大・山口雅彦；東大・奈良坂紘一・中村栄一；東工大・鈴木啓介；千葉大・西田篤司；京大・檜山爲次郎；阪大・村田道雄) が協力校・代表者として参加して頂けることとなった。[実は、同様の趣旨でアジア有機化学者の組織化を計画して、第 2 回日中若手のための有機化学会議 (2003 年・開催地・名古屋) の際にアジア各国代表の参加を求め、準備会を開催していたメンバーを中心としている]。申請から事業が開始まで 9 ヶ月間あり、5 ヶ国・地域のコーデ

ィネーター全員と個別に直接面会し、その意思の疎通を図るとともに各国・地域の財政支援団体への働きかけを求めた。その結果、日本 (JSPS)・中国 (NSSF)・韓国 (KOSEF・CMDS)・タイ (NRCT) からマッチングファンド方式の本事業に関する理解と支援を得ることに成功した。また、IUPAC からアジアにおける戦略的なネットワーク形成計画としてプロジェクトを立ち上げ、この事業に含まれる 5 ヶ国・地域を中心として、それ以外の先進地域や発展途上国を含めたネットワーク形成にも配慮する方式を模索した。

これだけの組織となると、各国・地域でそれぞれのカレンダー (学年歴・会計年度) が著しく異なるために、日本学術振興会の 4 月開始・3 月終了という形式は国外では全く通用しない。このため、事業報告・計画設定と予算申請という区切り方に違いがあり、当初から大きな困難が伴っている (これについては事業が進むにつれて 2 年目を終了する頃からは次第に慣れて、「できること・できないこと」が明確となった)。

4. 事業目標と展開

「アジアの最先端有機化学」という課題の展望は、国境を越えて研究交流・協力への努力をすることであった。本事業の参加メンバーが世界水準の有機化学研究のハブをアジアに創製することを努力し、国際交流と協力を開始することにある。そこで具体化の詳細を討論する機会を兼ねて名古屋大学で 2006 年 3 月に「第 0 回アジア最先端有機化学コンファレンス」を開催した。この時期は会計年度終了までにまず実行することという日本の事情のほか、メール会議では果たすことのできない面談会議方式により実施した上で、2003 年の準備会以降の問題点を新メンバーで明確化することにした。コンファレンスでは実際に、12 の講演と 68 のポスター発表があり、参加者総数は 110 名で、内訳は国外 25 名、国内 85 名 (拠点・協力校 62 名、企業 14 名、地域 9 名) であった。この時点で登録メンバーはアジア全体で 160 名であり、その半数が参加したことになる。研究発表の中から、3 件の大学院学生がポスター賞表彰を受け、また合計 10 名の研究者が 2006 年中に 1-2 回の海外講演旅行 (レクチャーシップアワード) に相互招聘することとなった。マッチングファンド方式では、訪問者が国際航空運賃を負担

し、招聘側が滞在費を負担する。

また、事業期間中に開催した第1回運営委員会では、今後の事業計画に対する熱のこもった討議が行われた。その結果、このような国際会議形式のコンファレンスを毎年持ち回りで5回開催することとした。2006年日本・沖縄、2007年韓国・釜山、2008年中国・上海、2009年タイ国・バンコク、2010年台湾・台北で開催することが決定された。主催国は開催年度に集中して経費負担が極めて大きい。このために、開催費用の一部を相互負担するためにコンファレンス参加者1人当たり一律に450USD程度の登録費を支払うこととした。またレクチャーシップアワードとして、1週間程度の相互訪問研究者をコンファレンス発表者（講演・ポスターを問わず）の中から選考し、最終日に発表することとした。同一研究者はその翌年に2件以内（2国・地域を超えて選ばない）という原則を設けた。選考された研究者はその翌年に訪問を実行し、結果を名古屋大学ACPホームページに報告することとした。レクチャーシップ以外にも、拠点・協力校の推薦により訪問・招聘事業、さらに予算が許せば短・中期共同研究を推進する（訪問研究者の滞在費負担）ことの3事業を核とすることとした。

本事業ではさらに次のような目的も掲げている。すなわち、アジアの持続的な発展のための教育活動である。最先端有機化学を維持発展させるためにも、アジアの底上げが必要である。IUPACの“Strategic Planning for a New East Asian Network for Organic Chemistry” (No. 2005-039-2-300, <http://www.iupac.org/project/2005/2005-039-2-300.html>)として正式採用されたプロジェクトと協力することとした。具体的にはワークショップをコンファレンスに併設・開催し、ACPメンバー国を中心として、それ以外の東・東南アジアからも代表格の若手研究者を各国化学会から推薦を受け、広く有機化学の研究推進に関する研究法を講述するもので、第1回沖縄会議から実施している。

4-1. 2006年

4-1-1. 第1回アジアの最先端有機化学国際会議 (ICCEOCA-1) 第1回アジアの最先端有機化学国際会議 (ICCEOCA-1) は、沖縄県那覇市チルル会議場で2006年10月16-20日に開催された。参加者は170名であり、ACPメンバー135名、企業研

究所15名、その他地元大学院学生などである。開会に当たって、タイ国 HRH Prof. Dr. Princess Chulabhorn 王女、ノーベル化学賞受賞者・台湾アカデミアシニカ会長 Prof. Yuan T. Lee, 理研理事長・野依良治教授の3氏から基調講演を頂いた。特に Chulabhorn 王女は、名古屋メダル特別賞ゴールドメダルに対する受賞講演を兼ねて「タイ産植物から得られる細胞毒性天然物の最新の研究」をお話頂いた。李教授の「単純な芳香族炭化水素の異性化と分解」、野依教授の「実用簡潔を求めたグリーンケミストリー」という基調講演をはじめ、特別講演5件、一般講演39件、ポスター発表93件があった。国内からの参加者は85名でその内訳は、ACPメンバー62名、企業14名、地元大学院学生9名である。国外からの参加者は合計73名であった。国・地域別では、中国13名、香港6名、韓国16名、台湾19名、タイ17名、シンガポール2名、フィリピン2名、マレーシア・オーストラリア・スイス各1名であった。2006年からはシンガポール (Loh Tek-peng) が正式メンバーとなり、国内では九州大学 (香月教授) が新規参入した。

第1回のアジア多国間コンファレンスでは、この領域の有機化学の世界一線級研究者が、その最先端の研究成果を披露し、アジアの有機化学者と研究討論する機会を提供することにより、アジアの研究者仲間という意識ができ、相互啓蒙という段階を経て、科学的な結び付きを強めるためのよい舞台となったと考えている。なお、レクチャーシップ2006は、45名の研究者を選考し、2007年に実施した。

IUPAC Workshop は、開催に先立って10月16日午前に開催された。ACPとIUPACとの協力行事としてIUPACのProject Chairでもある磯部の開会の挨拶に続いて、「マススペクトルの最新の進歩」について Bruker Daltonics の M. Pelzing 博士が、「計算機有機化学」について Hong Kong 大学の Yundong Wu 教授が啓蒙的な授業を行った。参加者は10カ国から35名であり、実施に当たって Paulin Chiu 教授が世話役を果たした。講義はビデオ撮影されており、今後のワークショップなど同趣旨の行事に活用される予定である。

沖縄熱帯植物園散策ののちのディナーでは、台湾及びタイの全参加者によるパフォーマンスもあり、研究討論だけでなく個人レベルでの相互理解を

楽しく進めることができた。このためか、最終日のバンケットでは自発的にその他の国が団体が催し物を披露するなど、楽しい時間も持つことができた。エキスカッションでは、沖縄美ら海水族館まで足を伸ばし、しばしコバルトの海と巨大生物を楽しんだ。会議の休憩時間・待ち時間では、沖縄の茶会や舞踊・民謡も披露され、伝統的独自の文化に親しむことができた。稲嶺県知事をはじめ、県庁の皆様・会場の職員皆さんにも大変お世話になった。

4-1-2. ポストコンファレンス・台湾・新竹市 Lakeside Hotel 沖縄会議に続いて、那覇市から飛行機で2時間足らずの台湾に移動し、10月21-24日の会期でポストコンファレンスが台湾・新竹市 Lakeside Hotel で開催された。基調講演2題、招待講演28題、ポスター発表55題と、熱心な勉強会が続いた。圧巻は、中国科学院の李所長の後任となった翁 (Chuwey Wong) 新所長が開会式ののち、基調講演を行ったことである。

会議には、地元台湾の大学院・ポスドク・若手研究者も多数参加し、世界をリードする高いレベルの有機化学の最新の情報を交換することができた。

4-2. 2007年

4-2-1. 第2回アジア最先端有機化学コンファレンス (ICCEOCA-2) 第2回アジア最先端有機化学コンファレンス (ICCEOCA-2) が2007年9月2-6日の会期で、韓国・釜山市グランドホテルで開催された。もともと KOSEF 及び KAIST の基金であるが、具体的には Sunggak Kim 教授の CMDS (Center for Molecular Design and Synthesis) の基金と、Kwan Soo Kim 教授の CBMH (Center for Bioactive Molecule Hybrids) の基金との両者の支援によっている。開催場所は、南海岸に面した美しいリゾート地域で、総参加者数138名であり、韓国41名のほか、中国16名、台湾18名、香港7名、日本44名、タイ国9名、シンガポール3名であった。

IUPAC の Workshop は、東工大の碓屋教授の「超臨界溶液の化学と応用」及び香港大学の Prof. Kong Hung Sze の「新しい NMR 技術の有機化学への応用」という内容の講演と、もりだくさんの質疑応答で展開された。なお、事業関連20校から35名が参加した。ACP 以外からはフィリピン及びマレーシアが参加した。世話役は、Hee Yoon Lee, Paulin Chiu, Minoru Isobe が務めた。

この頃までには (0回を含めて通算3回目) アブストラクトも定着して、A4の1頁の中に演題・発表者名に続き2カラムに分かれたカラーの絵付きテキストがあり、脚注には著者の写真と略歴が7-8行程度掲載された。脚注には母国語で書かれた発表者名があるおかげで、漢字国民にはなじみ易く、顔と名前が簡単に一致した。ハングル語・タイ語は、日本人には分からないけどやはり本名に間違いなく辿り着けるということは大切なことだ。

アジアの有機化学をキーワードとして開始された本事業は、さらに特化した領域で専門的な交流を深めている。また、これがきっかけとなって、新たに2国間交流が計画されたほか、大学・研究所間でも MOU (Memorandum of Understanding) の締結が盛んとなっている。若い世代の国際感覚形成のため、学生をこの領域に誘致する手段として、このアジア拠点形成事業は多いに影響を与え始めていると言えよう。

4-2-2. ポストコンGRESS・バンコクで開催される 2007年11月25-29日にタイ・バンコク市内シャングリラホテルで開催されたプリンセスコンGRESS -6 (The Sixth Princess Chulabhorn International Science Congress, PC-6) の中に、ACP-アジア最先端有機化学事業の一環として“‘The Interface of Chemistry and Biology in the ‘Omics’ Era: Environment & Health and Drug Discovery’”というシンポジウムが設けられ、本事業の中核的メンバーである、韓国・KAIST・Sunggak Kim, *東工大・鈴木啓介, 中国・南京大・Ren-Xiang Tan, *千葉大・石橋正巳, *中国・上海・Guo-Qiang Lin, 名古屋大・磯部 稔, シンガポール・奈良坂紘一・Roderick W. Bates, 東北大名誉教授・小笠原国夫, 台湾・Chun-Chien Liao の諸氏が講演を行った (*印は、2006-2007年のレクチャーシップ訪問を兼ねている)。

4-3. 2008年

4-3-1. 第3回アジア最先端有機化学コンファレンス (ICCEOCA-3) 第3回アジア最先端有機化学コンファレンスは、中国杭州市 (上海から西に200キロ・国際空港あり) の歴史的に有名な西湖湖畔の Liuying Hotel で2008年10月19-23日に開催された。なお、登録費が1人500USDに改定された。初日の午後にはIUPACのWorkshopが行われ、

Teck Peng Loh 教授（シンガポール）と Dr. Patrick Toy（香港大学）を講師として、それぞれ“Practical Green Chemistry”と“Polymer-assisted Organic Chemistry”を題目とする講演が行われ、42名の出席者が23校から参加した。世話役は、SIOCのMs. Liu Fei, Paulin Chiu, Minoru Isobeが務めた。ACP事業メンバー以外では、フィリピン、マレーシア及びインドネシアからの参加があった。

Table 1に示すように選考されたレクチャーシップ2009は、計59名となった。過去最高のレクチャーシップ数であり、これにより本事業の第1世代のかなりの部分はレクチャーシップを経験し、そろそろ次の世代に渡りつつあることがみてとれる。Table 1から分かるように相互にレクチャーシップによる訪問講義を行っている。

5. 本事業がきっかけとなり開始されたアジア他国の2国間交流事業

5-1 泰中2国間学術交流事業 第1回はタイ国チュラボン研究所コンベンションセンターにおいて2007年1月22日「中泰両国の薬化学・天然物化学研究」という課題で開催された。23-27日には場所を泰国研究基金に移して、「生物活性天然物の共同研究と利用：中国と泰の両国の展望」という課題で講演と討議が行われた。講演者のうち、Mei-Xiang Wang 及び Zhu-Jun Yao 両教授は2006年のレクチャーシップによった。

5-2. 他の学術交流事業 2007年の韓国・釜山コンファレンスの直前には、韓国・慶州市において「若手研究者のための日韓天然物化学会議」が開催された。参加者は両国各20名程度で、台湾からの参加者も1名含まれていた。これは、韓台両国における将来の研究協力事業への布石としている。

泰台両国の学術交流についても、2008年10月25-27日に（杭州市会議の直後）台湾・新竹市において開催された。課題は、天然物化学・有機合成化学・ナノサイエンス・発光材料化学・有機金属化学・医薬化学でシンポジウム形式で学術交流が行われた。タイ側からの講演は6件、台湾8件、日本1件であった。うち Tirayut Vilaivan 教授は2007年レクチャーシップによった。

これ以外にも、ACP事業の開始以前から活動している「日中若手のための有機化学会議（第4回）」

Table 1.

| abstract order | Inviting Country | Name | Country |
|----------------|------------------|------------------------|-----------|
| 1 L-11 | China | Nozaki, Kyoko | Japan |
| 2 L-12 | China | Chen, Chien Tien | Taiwan |
| 3 L-18 | China | Jun, Chul-Ho | Korea |
| 4 PA-29 | China | Kang, Sung-Ho | Korea |
| 5 PB-03 | China | Isobe, Hiroyuki | Japan |
| 6 PB-32 | China | Ploypradith, Poonsakdi | Thailand |
| 7 L-28 | Hong kong | Yoon, Juyoung | Korea |
| 8 PA-03 | Hong kong | Kudo, Fumitaka | Japan |
| 9 PA-23 | Hong kong | Tan, Choon Hong | Singapore |
| 10 PB-43 | Hong kong | Ishihara, Kazuaki | Japan |
| 11 L-10 | Japan | Loh, Teck Peng | Singapore |
| 12 L-16 | Japan | Yu, Zhi-Xiang | China |
| 13 L-18 | Japan | Jun, Chul-Ho | Korea |
| 14 L-20 | Japan | Guo, Zhi-Hong | Hong Kong |
| 15 L-21 | Japan | Zhou, Qi-Lin | China |
| 16 L-23 | Japan | Shin, Seunghoon | Korea |
| 17 L-3 | Japan | Chang, Sukbok | Korea |
| 18 PA-23 | Japan | Tan, Choon Hong | Singapore |
| 19 PA-38 | Japan | Lee, Hee-Seung | Korea |
| 20 PA-41 | Japan | Wu, Ming-Jung | Taiwan |
| 21 PB-2 | Japan | Chittchang, Montakarn | Thailand |
| 22 PB-36 | Japan | Zhai, Hong-Bin | China |
| 23 PB-38 | Japan | Yang, Jye-Shane | Taiwan |
| 24 PB-39 | Japan | Yao, Zhu-Jun | China |
| 25 PB-45 | Japan | Yang, Zhen | China |
| 26 L-12 | Korea | Chen, Chien Tien | Taiwan |
| 27 L-21 | Korea | Zhou, Qi-Lin | China |
| 28 L-26 | Korea | Osakada, Kohtaro | Japan |
| 29 PB-24 | Korea | Inoue, Masayuki | Japan |
| 30 PB-32 | Korea | Ploypradith, Poonsakdi | Thailand |
| 31 PB-41 | Korea | Chow, Hak-Fun | Hong Kong |
| 32 L-2 | Singapore | Ma, Da-Wei | China |
| 33 L-29 | Singapore | Ong, Chi Wi | Taiwan |
| 34 L-3 | Singapore | Chang, Sukbok | Korea |
| 35 PA-13 | Singapore | Gong, Liu-Zhu | China |
| 36 PA-28 | Singapore | Li, Wei-Dong | China |
| 37 PA-29 | Singapore | Kang, Sung-Ho | Korea |
| 38 PA-5 | Singapore | Cheng, Chien-Hong | Taiwan |
| 39 PB-24 | Singapore | Inoue, Masayuki | Japan |
| 40 PB-3 | Singapore | Isobe, Hiroyuki | Japan |
| 41 PB-33 | Singapore | Xu, Ming-Hua | China |
| 42 PB-44 | Singapore | Youn, So Won | Korea |
| 43 L-10 | Taiwan | Loh, Teck Peng | Singapore |
| 44 L-11 | Taiwan | Nozaki, Kyoko | Japan |
| 45 L-15 | Taiwan | Ooi, Takashi | Japan |
| 46 L-2 | Taiwan | Ma, Da-Wei | China |
| 47 L-24 | Taiwan | Iwabuchi, Yoshiharu | Japan |
| 48 L-28 | Taiwan | Yoon, Juyoung | Korea |
| 49 L-5 | Taiwan | Sawamura, Masaya | Japan |
| 50 L-9 | Taiwan | Kongkathip, Boonsong | Thailand |
| 51 PA-11 | Taiwan | Ahn, Kyo Han | Korea |
| 52 PB-39 | Taiwan | Yao, Zhu-Jun | China |
| 53 PB-40 | Taiwan | Kim, Byeang-Hyeon | Korea |
| 54 L-1 | Thailand | Narasaka, Koichi | Singapore |
| 55 L-23 | Thailand | Shin, Seunghoon | Korea |
| 56 PA-28 | Thailand | Li, Wei-Dong | China |
| 57 PA-42 | Thailand | Yoshimitsu, Takehiko | Japan |
| 58 PB-20 | Thailand | Sha, Chin-Kang | Taiwan |
| 59 PB-34 | Thailand | Kanai, Motomu | Japan |

が 2007 年 9 月に千葉市内で開催され、研究者数の多い両国にとっては、そのどちらかに参加する形で、研究課題を集約した形で本事業とのすみ分けを行っている。

6. おわりに

このように、ACP 事業においてアジアの最先端有機化学研究の拠点が日・中・韓・台・泰・シンガポールで着々と構築されている。これを基盤として次のステージへ向けた各国の有機化学関連学術交流事業が開始されている。さらに、研究拠点校相互の学術交流 (MOU 締結など) も活発化している。ネットワーク形成が着実に進行しており、IUPAC の事業である東南及び東アジア諸国 (フィリピン・インドネシア・マレーシアなど) との窓口 (代表派遣方式) も確保しつつ、本事業は当初の 5 年計画で所

期の目的を十分に達成することとなろう。2009 年のバンコク及び 2010 年秋の新竹市で開催される第 4 回及び計画最終となる第 5 回コンファレンスが待ち遠しい。このような実のある、また通年の交流を含めた事業が、今後もさらに充実した内容を目指すとともに、若手研究者の育成にも時間を掛けて努力を積み重ねる必要があるので、アジア諸国から、ぜひ継続して欲しいとの声は強い。本事業は、学振から中間評価 A を頂いたように、世界の中でのアジアの最先端有機化学の進歩は著しい。アジアジャーナルも定着し、高水準の本事業メンバーが編集委員の 4 割を占めることもその水準の高さを示すものである。既に 2 次産物的に数多くのアジア関連学術交流が生まれてきた。その中核的な役割を担う本事業がさらに発展するように望むものである。